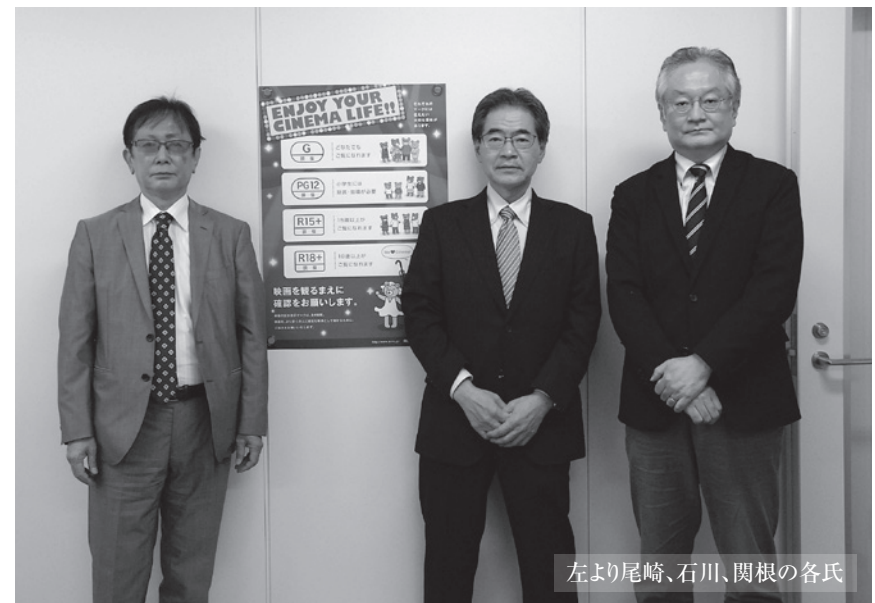


空前のメガヒットになった「劇場版『鬼滅の刃』無限制車編」は、様々な角度から多くのメディアによって取り上げられた。異例とも言える映画館の上映回数多さや、過去作が持つ興行記録を次々と塗り替える圧倒的な動員力が話題の中心だが、その流れの中で意外な点にもスポットライトが当たった。映画倫理機構（映倫）が審査を行う映画のレイティングシステムである。

「千と千尋の神隠し」「アナと雪の女王」「君の名は。」のように、興収100億円や200億円を超えるような大ヒット作は、老若男女問わず、あらゆる世代を巻き込んでブームになるケースがほとんど。映倫審査の区分では、そういった作品は年齢にかかわらず誰でも鑑賞できる「G」であることが当然だった。

その点で、12歳未満が鑑賞する場合に親や保護者の助言・指導が必要な「PG12」に振り分けられた『鬼滅の刃』が、小さな子どもからも受け入れられ、これだけの大成功を収めた事実、映倫にと

映倫の周知活動に追い風 鬼滅大ヒットで「PG12」に注目集まる



左より尾崎、石川、関根の各氏

■インタビュー
 一般財団法人 映画倫理機構
 石川 知春 専務理事・事務局長
 尾崎 誠 審査員
 関根 高樹 審査員

調査員の尾崎誠、関根高樹の各氏に聞いた――。

PG12の認知が高まった

――『鬼滅の刃』が、誰でも鑑賞できる「G」ではなく、小学生には助言・指導が必要な「PG12」の作品であることが話題になりました。この区分で200億円を超えた大ヒットは初めてですね。

石川 『鬼滅の刃』のヒットがありがたかったのは、PG12の認知を高めてくれたことです。業界内でもあまり理解されていないと

ころがありましたから。NHKや朝日の「小学生新聞」などに良い記事を書いて頂きありがたいです。尾崎 ネットの反応を見ていると、PG12映画への理解がかなり広まったと思います。ヤフーの「話題」に「PG12」というワードが上がってきたのです。「この作品は見ても大丈夫なの？」といった保護者の方の意見なども書き込まれていて、映倫のレイティングを意欲された方が今回はとても多かったですように思われます。

石川 G、PG12、R15+、R18+の4区分のこともですが、最近は映倫そのものが、一般の人からあまり知られていないのではないかと感じていました。昔は、映画の上映が始まる際、タイトルが出れば必ずそこに映倫マークも付いていました。私も子供の頃はそれを見て「映倫って何だ？」と思ってたものです。でも、今は（エンドクレジットの）最後にしか映倫マークが出てこなかったりして、若い人にはあまり認知されていません。映倫のシステムが知られなくなるのはイカンなことなので、

まずは区分を知ってもらうことが

先決だと思ひ、実は今年（知名度の低い）PG12を知って頂くための広報的な活動を始めていたところでした。ただ、新型コロナウイルスの影響で、当時は審査本数も激減してしまい、そこどころじゃないという状況が2、3か月間続きました。そんな中で『鬼滅の刃』が出てきて、PG12区分について多くの方に興味を持って頂いたのが、我々がつたなく広報するよりも、よほど効果が上がっていると思います（笑）。

嫌われがちだったPG12

石川 あともう一つ、PG12が付くことを嫌がる申請者も多いのです。

関根 でも、今回の大ヒットにより、PG12の作品でもヒットする。その意識は変わってくると思っんですよ。

――これまでは、PG12は避けられがちだったのですか。

尾崎 何としてもGにしてほしい。大人向けに作っているにもかかわらず、そういった要望をさ

れる申請者の方はいまいます。

石川 製作委員会でGで行きます。と言ってしまうと、その後はなかなか変えられない事情があるみたいですね。我々にGでないと困ります。と言われても困ってしまうのですが…。

尾崎 宣伝面でもGの方がいいのかもしれない。基本的にはあらゆる媒体に露出していききたいわけじゃないですか。でもPG12だと、どの媒体が大丈夫なのか、宣伝部が判断する必要があるのじゃない。

――Gにするためにやむを得ず映像表現を抑えていたところも、PG12作品の大ヒットによって、Gを気にせずに表現の幅を広げる製作者もいるでしょうね。

尾崎 それはあると思いますよ。作り手にとってもいい話だと思います。

関根 今までは自主的にそのような描写を減らしてきたのが、例えばPG12でも中身重視で作った方がいいんだ、と。すでにそういう認識の方も、よりその思いは強くなると思います。PG12を

嫌って、変にGにしてしまうのも

決しているわけではないので。事前のシナリオ審査で調整

――ちよつと伺いたのですが、2019年の審査状況を見ると、累計で邦画は446本、外画は472本審査されています。あまり割合は変わらないのに、PG12に限ると、邦画は41本、外画は103本となつています。2018年も、同じく邦画は39本、外画は87本と、倍ぐらい差があります。なぜ外画の方がPG12の割合は多いのでしょうか。

石川 邦画を審査する場合は、（作品が完成する前に）まず申請者にシナリオを出して頂き、希望の区分も伺います。例えば、希望がGでも、未成年がお酒を飲んでるシーンがあれば、申請者に「連続して、「G」を希望ですが、そのまま撮るとPG12が付くので気をつけてください」とお伝えします。あくまで審査であつて、検閲ではないので、「こうしろ」みたいな言い方はしません。ただ、「どうすればいいか？」と聞かれ

た場合は、「お酒は置いてあるけど、飲むところは映さないでください」といったアドバイスはします。そういったやりとりをするので、邦画の場合、作る前から（レイティングの）ランクを変えることが可能なのです。

一方で、外国映画はすでに出来上がったものが来るので、修正が難しいことが多く、配給会社は比較的そのまま受け入れてくれます。ですので、PG12が邦画に比べて多くなるのです。

尾崎 邦画でも、外国映画のように出来上がったものを審査したから、どう考えてもPG12だった作品は何本かあります。（事前に）何度やりとりしながら、最終的にGにした作品もけっこうあります。

――邦画はほとんどの場合、脚本を事前にご覧になっているのですか。

映画4区分



石川 脚本が無いこともあり、もう作品が出来上がつてしまつていて、プレスぐらいしかない申請書であらうが書いてあるだけとか。急に申請される方はそのようなケースがあります。尾崎 ただ、申請の経験のある会社は、やはり危ないと思えば、事前に脚本を送つてもらい、担当のプロデューサーからお電話頂き話をします。脚本を読んだら「ここはどうでしょうか」というやりとりをする場合があります。関根 それに基づいて、部分的にラッシュを先に送って頂いたり、完成版が出来る前の、編集が可能な時点で確認させて頂くこともあります。尾崎 作品が出来上がつてしまつてからは、例えばGを希望されても、こちらとしては「無理ですよ」ということになってしまうか

ねないですから…。

関根 ですから、作品によっては1年後2年後の、まだ全く企画として発表されていないものとして発表されていらないもので、先に台本だけ頂くケースも多々あります。守秘義務があるので、もちろん外部に言うことはありませんが。

映倫の歴史

——『鬼滅の刃』の場合、どのあたりがPG12の区分になる理由だったのでしょうか。

石川 個別の作品で、どこをどう審査したという内容は、我々からはお伝えできないのです。作品の申請者の方が話すことは何も問題ないのですけどね。

——なるほど、わかりました。では、そもそもPG12とは何か、歴史も含めて伺えますでしょうか。

石川 まず映倫の歴史をざっくり説明させてもらうと、もともと戦前は映画を国が検閲していました。戦後はGHQが検閲を行っていましたが、彼らはいずれ引き上げますから、「映画業界の方でやりなさい」となって、1949年

に発足したのが「映画倫理規定管理委員会」、つまり旧映倫です。これは、今でいう映連の中にあつた組織です。

しかし、1956年に公開された『太陽の季節』をはじめとする「太陽族映画」で、審査のあり方に世間から批判を浴び、また映画法が出来てしまうのではないかと

いう危機感の中で、映画業界とは一線を画した第三者機関の「映倫管理委員会」（新映倫）を1956年12月1日に発足させました。これが今に続く映倫です。2009年に名称が「映画倫理委員会」に変わり、2017年に法人化（一般財団法人映画倫理機構）しましたが、映倫」という呼び名は変わっていません。映画業界から独立した立場なので、我々も

もとは映画業界にいた人間が多いですが、映倫に来るときは出向ではなく、元いた会社を辞めて転職しています。

——映倫が設けている4区分についても伺えますか。今回のトピ

ックであるPG12は、1998年

R18という4つの区分が出来上が

りに新しく設けられた区分ですよ。PG12が生まれたきっかけは何だったのでしょうか。

石川 海外でもこういった区分はたくさんあったということが1つ。そしてもう1つは、海外のホラー映画の中に、残酷な作品がたくさん出てきたのです。これを子供たちに見せていいのか？という問題なり、PG12を取り入れたと聞いています。当時は、「12歳未満は、親または保護者の同伴が望ましい」というPG12の説明でした。

尾崎 当時委員長を務められていた清水英夫さんが海外に視察に

●太陽族映画問題

石原慎太郎の同名小説を映画化した『太陽の季節』が“成人向”映画として1956年5月に公開され、大ヒットとなった。ただ、その反倫理的な内容は各地で激しい反発を呼んだ。この作品を起点とした、いわゆる「太陽族映画」が続々と公開されるようになると、上映禁止運動が過熱。その憤りの矛先は旧映倫にまで及び、マスコミから「馴れ合い審査」などと映倫批判が高まった。こうした動きに呼応し、ついには文部省（現・文部科学省）が規制のため法的規制を辞さない強硬姿勢を見せる。国家権力による検閲制度の復活につながる危機感を感じた旧映倫は、映画界の自主審査機関という基本路線は維持しつつ、業界から独立した第三者機関「映倫管理委員会」（新映倫）として1956年12月に新たなスタートを切った。

——『鬼滅の刃』の場合、どのあたりがPG12の区分になる理由だったのでしょうか。

石川 1958年に、「成人向映画」が「成人映画」という名称に変わりました。その後、(ソフ トボルノと称された)『エマニエル夫人』が1974年12月に公開され物議を醸し、成人映画と一般映画の間に区分を設ける必要が出てきたため、「一般映画制限付(R)」という区分が1976年に新設されました。

その後、一般、R、成人の3区分がずっと続いてきましたが、1998年5月に「PG12」が誕生し、この時にG、PG12、R15、

R18という4つの区分が出来上がりました。

PG12が生まれたきっかけは何だったのでしょうか。

石川 海外でもこういった区分はたくさんあったということが1つ。そしてもう1つは、海外のホラー映画の中に、残酷な作品がたくさん出てきたのです。これを子供たちに見せていいのか？という問題なり、PG12を取り入れたと聞いています。当時は、「12歳未満は、親または保護者の同伴が望ましい」というPG12の説明でした。

尾崎 当時委員長を務められていた清水英夫さんが海外に視察に

つけようとしていますよね。2018

年12月の全国紙の地方版で、宮崎事件や酒鬼薙草事件とPG12の成り立ちを結びつけようとした取材を受けたことがあります。でも、酒鬼薙草事件が起きる前からPG12を作る動きはあったので、事件を受けた結果ではないのです。ただ、世相がそう流れていき、そういったことを考慮しないといけないと、必要性が高まっていたのは確かだと思います。

——ということは、やはりPG12の審査は暴力や残酷描写が中心になるのですか。

石川 そんなことはありません。性愛描写や、未成年の飲酒・喫煙でも、今の基準に照らし合わせて色々なところで判断しています。

尾崎 映倫のホームページでも公表されていますが、審査には8項目の映画分類基準があります。主題、言語、性表現、ヌード、暴力、恐怖、麻薬、犯罪。この8つに照らして、その映画がどの区分に当てはまるのか、という審査をやっています。

石川 PG12の場合、どこで

何が引っかかっていることが多い

かという統計はとっていませんが、(未成年の)喫煙シーンはけっこう多いイメージがあります。名作『ペーパー・ムーン』(1973年製作)は、昔の公開時はGでしたが、「午前10時の映画祭」で上映する際に審査したときはPG12になりました。

尾崎 喫煙はけっこうありますよね。『小さな恋のメロデー』(1971年製作)と『スタンド・バイ・ミー』(1986年製作)も、未成年者の喫煙の描写で、(午前10時の映画祭上映時は)PG12になりました。あとは、薬物の使用

でとることもありますね。**石川** 時代が変わってきているということですか。

関根 映倫の4区分は、普段から申請されている製作者の方は頭に入っているので、希望する区分で

どう描写すればいいのか、だいた

い把握して動かれていますからね。**尾崎** 露骨なセックスシーンがあるにもかかわらず、Gを希望する申請者はまずいません。ただ、

GとPG12の境目はあいまいとい

うか、わかりにくい部分があるの

です。PG12も、保護者の助言が必要と注意喚起していますが、子供同士で見えることを止めているわけでもない。「ではどう違うんだ」と製作側にもきちんと浸透していかないところはあります。業界の人がわからないのですから、一般の人に浸透していかないのも無理はない。ですから、『鬼滅の刃』のヒットで認知が高まったのは本当に良かったです。

関根 『鬼滅の刃』は、原作の漫画やTVアニメで作風をご存知の方が多く、首が斬られるようなシーンがあることも知られているのですよね。映倫がPG12をつけ

た。それでも多くの人が見に行く、PG12を受け入れてくれている、

イコールPG12が周知されてきて

いるのかなと思います。

審査本数が年々増加

——4区分の話から少しそれますが、今年はコロナの影響で本数は少なくなるでしょうが、基本的

に近年は審査の本数が増えています

すよね。脚本も読む必要があるの

ですから、作業量は大変でしょう。

石川 二次利用も含めて、2019年は1000本ほど(長編・中編・短編・新版などを合わせて1021本)を審査しました。それを9人の審査員が担当しています。1本につき必ず2人で見るとうにしています。ですから、1人につき1年で250本ほど、多いときは300本近く見ていると思います。

尾崎 私は、去年はピンク映画からアニメまで、250本ほどを審査しましたね。

石川 今年は、新型コロナの影響で、洋画メジャーの外国映画の審査依頼が止まっていますが、本数そのものは戻ってきており、8

月は前年比で増えました。ただ、

今(11月現在)はまたちよつと減

っていますね。

——映画好きの人から見れば羨ましい気もしますが、仕事で年間

250本はなかなか大変ですよ。石川 確かに羨ましいと思われ

ると思います。ただ、シナリオを

行き、(G、PG、Rの英語の)表記なども含めてリサーチされたそうです。

石川 そして、2009年に「R15+」「R18+」という名称となり、現行のレイティングシステムが施行されました。

——PG12は、残酷・暴力描写がきっかけで設けられた区分なの

ですか。

尾崎 80年代よりは、性愛描写が審査の焦点だったと思います。ところが、1997年に神戸で「酒鬼薙草事件」が起き、その前には「宮崎事件」もありました。暴力が青少年に与える影響を、映倫としても考えなければいけないのではないかと。

石川 その事件があったから、と直接結びついているわけではありません。例えば、宮崎事件の場合、犯人の自宅から残酷な描写の作品のビデオが出てきたと報道されたことありますが、実際は色々なジャンルのビデオがたくさんある中で、一部そういったジャンルがあったという程度だったようです。でも、マスコミはそれを結び

ているので大変です。

——鑑賞中に寝ませんか？

尾崎 不思議と寝ません。家でのんびりと見ている時は眠くなることもありますが(笑)。

石川 プライベートで映画を楽しもうとする時も、つい審査してしまします。

尾崎 そうそう(笑)。

石川 他の審査員が見た作品で、PG12とかが付いていると、「ああ、ここぞとつたんだ」とか。

関根 作品を見て感動している一般のお客さんが羨ましいのです。例えば『鬼滅の刃』の最後の戦いの場面では、お客さんは涙を流していると思いますが、私たちは「これ以上は(残酷に)ならないでくれよ」とかいう感じで見てしまっているので(苦笑)。

石川 私は以前興行の仕事をしていたので、それが終わっても、映画を数字で見るクセがなかなか抜けず、素直に楽しめるようにならな